



切り絵『舞』  
比企善彦 作

# うぶすな

茨木神社社報

発行所

茨木神社社務所  
茨木市元町4-3  
072(622)2346  
[http://www.  
ibarakijinja.or.jp/](http://www.ibarakijinja.or.jp/)

## 神楽

上掲の絵は、夏祭に当神社雅楽会が奉納された神楽『豊栄舞』の一場面です。

かつて宇宙飛行士若田光一さんが国際宇宙ステーションに滞在の折、船内で笙を演奏した場面がテレビで報道されました。この笙は、日本古来の楽器で神前で神々に奉納する神楽に使われる楽器の一つです。

神楽は、天照大御神が天の石屋戸にお隠れになった際、その前で舞をされたのがはじまりとされています。神楽を舞うことで、神様をお慰めしお喜びいただいで、そしてご守護をいただくという信仰によります。

神楽は、時代とともに宮中で舞われる御神楽と民間で行われる里神楽に分かれてきました。

御神楽は、三種の神器の一つである御神鏡（八咫鏡）を安置した宮中内侍所（皇居賢所）の前庭で舞われるもので、現在では、宮内庁楽部により十二月中旬に行われ、その他の祭典等でも奉納されます。

里神楽は、民間で行われる神楽の総称で江戸後期以後に、それまでの素朴な舞に手が増えられ又は新たに創作され、舞われるようになりました。今日、巫女神楽・高千穂神楽・出雲流神楽・伊勢流神楽・獅子神楽などがあります。巫女神楽に分類される中に浪速神楽と呼ばれる神楽があり、当社を始め多くの神社で祭典の時などに舞われています。

上掲の豊栄舞は、乙女舞とも呼ばれ、舞人は神または、季節の花を右手に持って舞います。作詞は白田甚五郎氏、曲は宮内庁楽部の初代楽長・東儀季熙氏の作曲によるものです。

一、あけの雲わけうらうらと 豊栄昇る朝日子を  
神のみかげと拝めば その日その日の尊しや  
二、地にこぼれし草のみの 芽生えて伸びて美しく  
春秋飾る花見れば 神の恵みの尊しや

昭和二十五年、設立間もない神社本庁は、独自の祭祀舞「朝日舞」と「豊栄舞」を制定しました。豊栄舞の歌として定められたのがこの曲で、作詞にあたって最初に思い浮かんだ詞が「豊栄昇る」という詩句で、これに表象される素朴な太陽信仰と神まつりの伝統を歌い込んだのが一節の歌詞であり、続く二節は、空襲で焼けた大地の中に、草が真っ青に萌え出ていた光景からイメージされました。自然のなせる業、生命力そのものに神の出現を乞い願う感じ連綿と受け継ぎ、舞い続けられたのが神楽なのです。

### 坂上田村麻呂 と茨木

由緒書きによると当神社の創祀は「大同二年（八〇七年）坂上田村麻呂が荊切の里をつくりしとき、天石門別神社が鎮座された」と伝えていきます。

坂上田村麻呂は、平安時代初期に征夷大將軍として奥州蝦夷征伐に活躍した人物。延暦二十年（八〇一年）には、征夷大將軍坂上田村麻呂の征討によつてついに蝦夷の力リスマのリーダーであった阿弓流為と母礼が投降し、百年以上に及ぶ戦いに終止符がうたれ、律令国家体制が東北にまで及ぶこととなります。

このように田村麻呂は奥州平定の大功労者であることから、後の世に、英雄田村麻呂として数々の伝説や逸話が生まれるとともに今日、田村麻呂の創建と伝えられる寺が多数存在する。そして当社にも前記の由緒が伝えられているが彼が主導して直々に当地に村里を造つたとは考えにくい。しかし、その一方で田村麻呂と何らかの関係があるからこそこのような伝承が生まれたとも考えることができる。田村麻呂が造つたと伝わる「荊

切の里」は今日の茨木市宮元町付近と考えられています。牟礼遺跡や中条遺跡などから古代の水路や住居跡が確認されていることからこの地域では、かなり以前から人々の営みが既に行われていた。

律令体制の推進に伴せ条里制が敷かれる中、安威川と茨木川に挟まれたこの処は、島下郡の真中地域として開墾が進められたことだろう。そして、開墾のため又耕作のため周辺集落部から移り住む人達が小さな集落を形成していったことでしょう。

朝廷では各地の開墾・開墾を推進するため戦いで敗れた者、特に、奥州蝦夷に対しては、勢力を弱体化させるために征討軍派遣前に既に移住先を決め、征伐後投降した蝦夷の強制移住を実施していきました。移住先では国司の管轄下に組み込み開発に従事させるともに律令民としても処遇したのです。

この移配は、国司からの上奏によつて決められることが通例ですが、この征討の三年前、田村麻呂は自ら天皇の御幸時の行宮（宿所）を決めるため摂津国と和泉国を巡察しています。既に征夷大將軍に任命され征討軍を率いることが決定されている時でもあり、この両

国での移住先を同時の調査していたのではないかと思われる。

蝦夷の移配先・人数は、六国史に詳しく書かれているが坂上田村麻呂が征夷大將軍として戦つた延暦二十年（八〇一年）の征討についてはなぜか記載がありません。

この時これまで惨々征討軍を悩ませた蝦夷の力リスマのリーダー阿弓流為が五百人の部下を引き連れて投降してきた。この蝦夷の投降は、永年に亘る戦いの疲弊はもちろんです。田村麻呂の軍事的のみならず民生的な政策による田村麻呂への信頼が投降へと結びついたり云われている。にも拘わらず五百人のその後の記述・消息がない。それまでの戦いでは何人斬殺、何人を〇〇国へ移配（移住）とその戦果を誇らしく記述されているにも拘わらずです。

これまで征討後の移配が蝦夷の戦闘力・勢力の分断から実施されてきたことから考えると、各地に移配されて当然かと考えます。そして五百人の一部とその家族が此の所の開発のため移住したと思われない。

そして、この入植者達が入植の経緯から新たな村の成立を英雄坂上田村麻呂に求め語り継いだので

はないだろうか。さらに入植者達が入植した此の地を「いばらき」と呼び、また「天石門別神社」の創祀へと継がっていったと考えられるのではないか。

ちなみに田村麻呂は、投降した阿弓流為と母礼を都へ連れて行き、許しを乞うて再び奥州のリーダーとして律令体制下に組み入れようとするが朝廷はこれを許さず処刑することとなります。

(次号へ)

#### これからの主な行事

##### 大祓神事

六月三十日 午後二時斎行

茅の輪くぐり

厄除神楽

##### 夏祭

七月十三日 宵宮

十四日 本宮

神輿渡御 神楽奉納

未仕事平神社例祭 九月十日

例大祭（秋祭） 十月十日

七五三詣 十二月中随時

赤社惠美須神社例祭 十二月二十日

天石門別神社記念祭 十二月二十二日

新嘗祭 十二月二十三日

大祓・除夜祭 十二月三十一日



# 日本の偉人 頼山陽

鞭声(むちごゑ) 肅(じゆう) 夜(よ) 河(か) を渡る

曉(あけ) に見る千兵(せんべい) の大牙(おほが) を擁(よう) するを

遺恨(いこん) 十年(じゅうねん) 一劍(いっけん) を磨(こ) き

流星(りゅうせい) 光(ひかり) 底(そこ) 長(なが) 蛇(へび) を逸(い) す

上杉謙信と武田信玄による川中島の合戦を詠んだ有名な歌。これを作った人が頼山陽です。

頼山陽は安永九年(一七八〇年)

十二月二十七日大坂江戸堀(大阪市区)に生まれました。父の頼春水は詩や書に才能を発揮し、朱子学の研究を進めながら大阪で私塾を開いていましたが、広島藩に藩儒として招聘され、一家は広島に安芸に移ります。六歳から広島で暮らすことになった山陽は、その多感な時期に様々な学問を吸収し、やがて文学から歴史に興味を示し始めます。十三歳の時

十有三春秋(よ) 逝(い) く者は已(や) に水(みづ) の如(ごと) し

天地(てんち) 始終(しじう) 無(な) く人生(じんせい) 生死(せいじ) 有(あ) り

安(やす) ぞ古(こ) 人に類(る) して

千載(せんざい) 青史(せいし) に列(れつ) するを得(え) ん

(私ももう十三歳になった。年月は川の流れるように、どんどん過ぎ去ってしまう。天地は、始まりも終わりもないけれど、人間には生死がある。どうした

ら昔のすぐれた人々の仲間入りをして、歴史の中に残ることができるだろうか。)

という詩(原文は漢詩)を著し周りのものを驚かせます。

しかし、幼児より神経症に悩まされ、治療を兼ね十八歳で江戸に行き、昌平坂学問所に遊学しますが、これを機に脱藩してしまします。すぐに探し出され、二十四歳まで自宅の一室に監禁されます。ところが、山陽にとつては、逆に

学問に専念するチャンスとなり、この期間に一気に、彼の代表作となる『日本外史』の骨格を書き上げます。

史家として、また書家、詩人、さらに美術や音楽評論などの芸術分野、加えて政策への提言とマルチな才能を発揮した山陽は、広島で開いていた私塾・廉塾(れんじゆ)の塾頭として招かれますが、更なる高みに登りたいと三十二歳で、藩に無届で脱藩同然に京都へ行きます。再び罪に問われるところでしたが、周りが奔走してくれたおかげで、念願の京都で暮らすことになり、『東(東)江戸(江戸)の(佐藤)一斎(一斎)、西(西)京(京)の山陽(山陽)が文章(ぶんしょう)の双壁(すおうへい)ではないか』といわれるまでになります。『日本外史』は、その後、二十

年かけて推敲に推敲を重ね、山陽四十七歳の時に完成します。老中の松平定信に献上された後、文政十二年(一八二九年)に発刊され大ベストセラーとなります。内容は、尊王論を柱に、平安末期の源平の争いに始まって、同時期の第十代將軍の徳川家治の治世までを扱う歴史書です。民の立場で考え、民が富めば、国が栄え、国が栄えれば、指導者たる君主のためになるという論法を用います。これが、幕末の勤皇思想の志士たちのバイブルとなり尊王攘夷運動の際に多大な影響を与える事になります。安政の大獄で処刑された山陽の息子の頼三樹三郎を始め、吉田松陰、橋本左内、梅田雲浜らも『日本外史』を愛読していました。NHKで放映中の「花燃ゆ」でも何度か『日本外史』がでてきました。こうした一連の流れから、尊王論を柱にして書かれた『日本外史』はいつしか“倒幕の書”と呼ばれるようになるのですが、あの新撰組を結成した近藤勇の愛読書が『日本外史』であり、近藤勇自身「近藤外史」の号を用い、山陽を真似た筆跡の書を残しているところから、決して倒幕の書ではなく佐幕派からも愛読されたまさに国民

的な歴史書だったといえます。

晩年に『日本政記』執筆中、肺の病にかり、一部を弟子たちに引き継がせ完成させて生涯を閉じます。天保三年(一八三二年)九月二十三日、享年五十三歳でした。

明治の言論人として一世を風靡する徳富蘇峰は祖父の徳富鶴眠と山陽と面識があり鶴眠からくり返し聞かされた山陽への憧憬が基になって全百巻にも及ぶ『近世日本国民史』を著したともいわれています。明治天皇は『日本外史』の進講を受け、明治十五年(一八八二年)、陸軍軍人に与えられた『軍人勅諭』の文は、「日本外史」に酷似しているともいわれます。吉田松陰門下生で、日本初の総理大臣となった伊藤博文は、山陽晩年の書『日本政記』の熱心な愛読者であり、若き日に海外へ密航した際は『日本政記』を携帯しています。長州主導によつて打ち立てられた新たな根幹には、山陽の著書があつたともいえます。



## 茨木音楽祭

風薫る五月晴れの下、今回で七度目を数える「茨木音楽祭」通称「茨音」が五月五日の子供の日と六日の二日間に亘り開催されました。「音楽を通じてまちを元気にしよう」という思いで始まった催しですが、市民参加型の音楽イベントとして今ではすっかり茨木市の恒例行事として定着してきました。



今回は屋内外合わせて全十九の会場でプロ・アマを含め約百三十名を超えるミュージシャンがそれぞれのパフォーマンスを繰り広げました。また、音楽以外にもフリ

ーマーケットや手づくり体験コーナーなど、幅広い年齢層の方々にも参加して頂けるような、趣向を凝らしたイベントを市内各所で実施されました。

当社の境内も市内七会場で開催される屋外会場の一つとして、昨年同様「食」「音楽」「芸」をテーマにした様々な催しが行われました。「むばらけステージ」と名付けられた当社境内ですが、この「むばらけ」というネーミングは、私たちのまち「茨木(いばらき)」ができた九世紀の初め頃このように発音されていたと考えられていたことに因んでいます。

境内で実施されたイベントは、境内中央に設営されたステージでの音楽演奏を中心に、竹と藁を使得て作成した小屋の展示や、本殿北側ではダンスヨガという、親子がからだを動かしながら楽しく遊べるコーナーもあり、心地よい音楽が流れる境内は、天候にも恵まれ、終日とても賑わいました。



## 奉賛会だより

本年も、四月十八日当社の祈年祭である春祭りとして併せて奉賛会厄除安全祈願祭が、例年になく多数の参列のもと斎行されました。

午後二時より本殿にて祭典。祝詞奏上、神楽奉納の後、宮司玉串奉奠に続いて奉賛会を代表して木内孝至会長が玉串を奉奠されました。

その後、会場を参集殿に移し、総会が行われました。

総会終了後は、趣味の歴史探訪を生かされ、現在茨木市観光協合理事として地域発展のために活躍されています石田正雄様に「中川清秀公」と題しお話しをしていただきました。中川清秀は、当社にも清秀公の銘のある「禁制札」が現存しており縁のある人物です。清秀公の家来衆について、あまり知られていない人々にまでいろいろエピソードを加えながらお話しいただき、大変興味深く聞くことができました。

そして、直会懇親会と続き盛會裡に終了いたしました。

一昨年より、日帰りの神社参拝バスツアーを行い、ご参加いた



いた皆様には大変ご好評をいただいております。今年は、秋に春日大社への参拝を予定しております。会員の方には、新年諸祭儀や夏の大神事等々のご案内や会員の誕生日における誕生祭斎行、また毎月の祭典奉行では会員の家内安全・厄除開運をご祈願申し上げます。また、年末には毎年の神札の授与、暦等を年末に配布贈呈させていただきます。年会費は三千円です。

ご入会いただけます方は、社務所までお問い合わせください。奉賛会では随時会員を募集しております。